

Histoire culturelle de la France

sous la direction de

Jean-Pierre Rioux et Jean-François Sirinelli

Tome I: Le Moyen Âge

by Michel Sot, Jean-Patrice Boudet, Anita Guerreau-Jalabert

©Éditions du Seuil, 1997 et 2005

Japanese translation rights arranged with Les Éditions du Seuil, Paris
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

凡例

一、本書は、Jean-Pierre Rioux, Jean-François Srinelli 監修による「Histoire culturelle de la France」(全四巻)の第一巻「Le Moyen Age」の邦訳である。原題を直訳すれば「フランス文化史」であるが、ル・ゴフらによる同じタイトルの既刊本との重複を避けるため、「中世フランスの文化」とした。

一、本文で出てくる人名については、巻末に索引を付け、近代以後の歴史学者などについては、姓名から引けるようにしたが、中世ヨーロッパにおいては、まだ姓名という概念がなく、現代人にとって姓名のように考えられているものも出身地名であることが多いので、ファースト・ネームから引く形で並べた。

一、また、中世の人物の名前の表記に関しては、ラテン語式、古ゲルマン式、現代のフランス語や英語式のいずれにするかという問題がある。とくに中世初期には聖職者や学者だけでなく王侯も、当時においては、ラテン語式で呼ばれたと考えられるのでラテン語式表記を優先したが、こんにち広くフランス語式の呼称が定着しているものは、それを採用した。例をあげると、シャルルマーニュは当時は「カロルス」と言っていたと思われるし、宮廷を置いたアーヘンは現在のドイツに含まれるから「カール大帝」とすべきところであるが、本書が「フランス文化の歴史」であることから、フランス語式に「シャルルマーニュ」とした。ただし、その長子のルートヴィヒ敬虔帝については、フランス語式では「ルイ」になるが、記述されている事績はフランス文化との関わりが薄いことから「ルートヴィヒ」にした。フランス史初代の王「クロロヴィス」は、当時のフランク族の呼び名では「クロドヴェヒ」が近いのであろうが、フランス史で一般的に使われている慣例に従って「クロロヴィス」とした。

【目次】

序 文 2

第一部 フランク王のもとでの文化の伝承と刷新（五―十世紀）

ミシエル・ソ

第一章 フランク人の文化意識の神話と現実 20

一、フランク王国の歴史家、トゥールのグレゴリウス 21

二、ローマ人とフランク人の連続性 26

三、「われらの先祖ガリア人」との決別 31

四、ガリアにおけるフランクのアイデンティティの確立 37

第二章 フランス語の創成 45

一、五世紀のガリアの言葉 48

二、ゲルマン人侵入の衝撃とラテン語の維持 51

三、ラテン語の復活とフランス語の創出 55

第三章 晩期古代の文化（五―七世紀） 66

一、五世紀ガリアにおける晩期古代の文化 66

二、聖職者的・修道士の文化への収斂（五〇〇―六五〇年） 79

三、保存された文化（六五〇―七五〇年） 101

第四章 《カロリング・ルネサンス》と文化 112

一、《カロリング・ルネサンス》 112

二、カロリング文化 140

第二部 創造の時代（十一―十三世紀）

アニータ・ゲロルジャラベール

第五章 知と社会 158

一、教育機構——司教座（修道院）学校から大学まで 159

二、社会のなかでの教師と知識人 173

三、文字の価値と利用 179

四、中世の教会 197

第六章 教会文化 213

一、自由学芸 214

二、教会文学 226

三、神学 234

四、画像 271

第七章 宮廷風文化 278

一、宮廷風文学の特徴 279

二、文学的創造の發展 288

三、中心的テーマとしての《宮廷風恋愛》

313

第三部 中世文化の美しい秋（十四、十五世紀）

ジャン＝パトリス・ブデ

第八章 教育環境のダイナミズムと障碍 346

一、人生の諸段階 346

二、教育における伝統と刷新 349

	三、緊密化する学校網	357
	四、大学 (universités) と学寮 (collèges)	365
	五、言葉による教育	384
第九章	国家の進展と文化	390
	一、文書行政と官僚主義的中央集権化	390
	二、パリ——フランスの文化的首都	395
	三、尚書院の文化——フランス・ユマニスムの萌芽	403
	四、聖俗君侯たちが示した手本	411
	五、政治的文化の飛躍	436
第十章	社会文化的収斂と亀裂	454
	一、それは、「文化的同化」か？	454
	二、共感的価値	457
	三、共同体的祭儀	467
	四、社会的分化と接触	475
第十一章	ルネサンスへの序曲	515

一、印刷がもたらした革命	516
二、新しい文化に向かって	530
訳者あとがき	543
参考文献	560
人名索引	582

第二章 フランス語の創成

フランス文化史のなかで重要な位置を占めているのが、フランス語の創成の問題である。フェルディナン・ローは、一九三二年に発表した有名な論文のなかで、「人々は、いつからラテン語を話すのをやめたか？」という問題を提起した。この根底にあったのは、ラテン語が話されなくなったときがフランス語が話されるようになったときであるという考え方であったが、事實は、そう単純ではない。

言語学が教えているところによると、一つの言葉は、それぞれに固有の歴史をもつ様々な領域の混じり合いによって成っている。ラテン語の構文法を調べると、名詞の性・数・格による語尾変化 (*declinaison*) は西暦一世紀から五世紀の間に崩れているが、動詞の活用変化 (*conjugations*) が変わるのは西暦五〇〇年以後であることが分かる。発音の領域では、強勢母音 (*voyelles toniques*) が混乱しはじめたのは、西暦一世紀から三世の間であるが、旋律アクセント (*accent melodique*) から強度アクセント (*accent d'intensité*) に移行するのは五世紀以後で、語尾の母音が脱落するのは八世紀のことである。語彙 (*lexique*) に関しては、ゲルマン系の語彙が増えるのは五世紀以後である。

要するに、言葉の受容に伴うあらゆる現象が、少なくとも八百年という時の流れの上に散らばっているであって、したがって、ガリアでラテン語が話されなくなった時期を言語学の物差しだけで確定することは

不可能である。他方、文献学者たちは、その専門がラテン語であるかロマンス語であるかによって、この問題について到達する結論はきわめて異なったものとなる。ロマンス語学者からすると、原フランス語は非常に古い起源をもっており、結局、ラテン語がローマ属州それぞれに固有の色彩を帯びて変化していったものの一つであり、したがって、フランス語の歴史は、ユリウス・カエサルによるガリア征服をもって始まったことになる。これほど昔に遡ることはないにしても、多くの著述家たちは、ロマンス語の起源を二世紀末以後のローマ帝国の凋落期に設定することでは一致している。なかには、西側帝国最後の皇帝の廃位（四七六年）というシンボリックな年代を採る人もいる。このころガリアで話されていたのは、もはやラテン語ではなく、ガロ・ローマ語であった。しかし、それは、ヨーロッパの他の地域でも同じで、イタリアで話されていたのはイタロ・ローマン語、イスパニアで話されていたのはヒスパノ・ローマン語であった。逆にラテン語学者からすると、ラテン語が原フランス語になったのは、ずっとあとのことで、九世紀以前ではありえない。

この論争に決着をつけるためには、言葉の内側からの分析という文献学的視野から脱却する必要がある。言葉は、抽象的に存在するものではなく、さまざまな社会的集団がそれを使っているという事実によって成り立っているからである。社会学が明らかにしているように、文化とその文化を保持する社会とは不可分であるから、言葉は一つの社会的制度とその実践として考察されなければならない。

言葉の使い方は、非常に複雑で、口でしゃべると文字に記すのと二つのやり方であられる。フェルディナン・ローが提起したのは話し言葉に關してであり、歴史家がまず興味を抱くのもこちらである。とくに文字を知らない社会を扱う場合は、そうである。しかし、話し言葉であっても、研究にあたっては、知識階級の人々が文字で書いた史料によって探求せざるをえない。したがって、人々は長い間、エリートたちに

よって書かれ話された《文学的ラテン語》と、民衆によって話されるのみで文字に書かれることは稀であった《卑俗ラテン語》(先の文学的ラテン語の崩れたもの)の二種類があると考えてきた。

ミシェル・バナールは、初期中世のキリスト教文化を捉えるための重要な観察対象として聖職者の説教に焦点を当て、現在の「コミュニケーション」の考え方を援用することによって、この問題を一新した。

「コミュニケーションという考え方をすると、ラテン語のヴァイタリティーを測ることができる。ラテン語も、学校教育と無縁で日常用語として母語しかもっていない聴衆たちの集団的教育を引き受けるのに適した言葉であり続けた間は、現実的な力をもっていた。」

そして彼は、話し言葉としてのラテン語が本来柔軟な言葉であり、二種類にとどまらずたくさんのレベルのラテン語があつたのであって、そのことは、蛮族侵入後の西暦五世紀とか八世紀だけでなく、西暦一世紀にもそうであつたとする。あらゆる言葉がそうであるように、会話で使われたラテン語にも、まじめなものとだけなのとがあり、街のなかで使われるラテン語と軍隊とか田園で使われたラテン語、また、地方的ラテン語のように、種々の多様性がある。西暦一世紀の文法学者や修辞家たちも、その時代の話し言葉のラテン語の乱脈ぶりを憤慨していたし、他方、五世紀になっても、キリスト教の説教師たちは古典的文法の規範になつたラテン語で説教している。

いまわたしたちが問題にしている時代(西暦五世紀から十世紀まで)の大きな現象は、ラテン語によるコミュニケーションと、やがてロマンス諸語を形成していった新しい口頭によるコミュニケーションとの間に

断絶が生じたことである。それは、フランク文化とラテン文化の連続性と、そこからフランス語が生まれた断層の歴史である。

一、五世紀のガリアの言葉

前章で述べたように、ガリア人たちは、文学的にせよ政治的にせよ宗教的にせよ、およそ文書というものを遺さなかったし、自分たちの言葉に関する直接の証言を何一つ残さなかった。わたしたちが知っているケルトの語彙は、ラテン語やギリシア語の著作のなかに保存されているものだけである。ギリシア語やラテン語と同じく、ケルト語もインド・ヨーロッパ語群の一つであり、結局、かなりラテン語に近い。一つだけ例をあげると、《王》を意味する語は、ケルト語では「rix」であるのに対し、ラテン語では「rex」である。このことから、ガリア人たちにとってラテン語を習得することは比較的容易であったようで、ガリア語はラテン語に取って代わられて、四世紀にはほとんど消滅していた。

それでも、幾つか稀に、フランス語のなかに名残を遺しているガリア語がある。農耕に関するものとして「charru」(犁)、「soc」(鋤の刃)、「raie」(畝)、「sillon」(畝溝)、「glaner」(落穂を拾う)など、木工用語では「char」(荷車)、「tonne」(大樽)、「benne」(負い籠)、「bonde」(樽の注ぎ口)などである。しかしながら、西暦五世紀を過ぎても、ケルト語が全面的には放棄されていなかったことを裏づける証拠が幾つもある。

四七〇年ごろ、クレルモンの司教であり詩人でもあったシドニウス・アポリナリスは、「貴族階層（カロ
「ローマ人）はケルト語の粗雑な皮を脱ぎ捨てると書いています。周知のように、まずローマ化したのは都
市社会であって、田舎では、もっと長い間、ケルト語が使われ続けていたと考えられる。」

事実、ラテン文化のあらゆる要素、学校で教えられた教科、とりわけローマからやってきたキリスト教信
仰がガリアに広がったのは、都市を通じてであった。古代ガリアにおいては、ローマの言語つまりラテン語
の習得は、文法と修辞学の学校で、文字に書くのと口で話すのと、二つの形態のもとに行われた。そうした
学校は都会にしかなかったから、ラテン語を読み書きできることは、その人の都会的洗練ぶり（urbanité）の
特徴となっていた。《都会的洗練》は、農民を典型とする卑俗な人間の《田舎臭やrusticité》に対立するもの
で、この《都会的洗練》と《田舎臭さ》の間の社会的道徳的審美的価値のヒエラルキーは、古典時代にあつ
ては直截的であった。

ところで、キリスト教信仰が伝播するにつれて、この価値のヒエラルキーは壊されていった。事実、聖書
とその注解を学び、教義の根本に到達するためには、言語の習得と都会的教養（urbanitas）が不可欠であつ
たが、その他方で、説教師としてキリスト教のメッセージを民衆に伝えるためには、《田舎臭さ》を援用す
ることも避けるわけにはいかなかった。司牧のあり方を教えたあらゆる指示は、聴衆の理解能力を配慮する
必要性を強調している。この意味でしばしば引用されるのが、ヒッポのアウグスティヌスの「民衆に理解さ
れないことよりも、文法学者たちに批判されるほうがましである」との言葉である。そして彼は、民衆に理
解させるためには、キケロが「偉ぶらない説教 *sermo humilis*」と言っているもの、すなわち、古典的修辭家
たちが打ち立てた弁舌のヒエラルキーのなかで最下位の「シンプルな弁舌」を援用するよう勧めている。彼

が言っているのは、あくまでもラテン語の弁舌に関してであったが、アルルのカエサリウスやランスのレミギウスのような、自らを「まず司牧にして説教者」と規定したガリアの司教たちも、この点については、ラテン語の枠を超えて同じように考えたし、そのように実践した。

いかなる学者といえども、キリスト教が民衆の起源をもっていたことを無視できなかつたし、キリスト教の教えのなかには、さまざまなレベルの言葉が入り混じっていて社会的道徳的価値のヒエラルキーを覆すものを秘めていた。イエス・キリスト自身が大工の息子であったし、使徒たちも漁師や職人であったから、いわば《田舎者 *rustiques*》であった。したがって、「田舎臭さ」は、福音を伝えるための手段ではなく、キリスト教徒たちの身分の低さに由来するものであった。キリスト教が広まるにつれて、ローマ世界の《都会的洗練》と《田舎臭さ》の間の理論的關係は当初の明確さを失ってしまった。ところが、五世紀のガリアでは、司教は社会的文化的エリートであり、文字文化全体が聖職者のものであった。ローマ帝国の跡を引き継ぎ、精神的文化的言語的ローマニアの統一性を維持したのがキリスト教だったのである。

もちろん、この主張には陰影をつける必要があるし、少なくとも言語上の統一性 (*unity*) は画一性 (*uniformité*) を意味するのではないことを明らかにしておかなければならない。すでに西暦二世紀には、ガリアだけでなく帝国内の他の地域でも、はつきりそれと判る言葉の方言化 (*provincialisation*) が見られた。この方言化は、五世紀末、幾つかの都市で文法教育を維持してきた古代の公的學校が消滅したときから加速する。学識豊かな司教たちも、布教の必要性から、自分の言葉をこうした地方的進展に合わせざるをえなくなり、その結果、各司教区あるいは司教区群それぞれが、言語上の統一体になっていく傾向を示す。こうして、ラテン語がさまざまな異なるレベルで変容していったプロセスが観察されるのである。

しかし、その他方で、聖人たちの伝記や奇蹟物語（それらは、さまざまな聖域に巡礼でやってきた民衆に読み聞かせることを目的にしていた）を記したテキストについて、その著述家が使っている言葉を調べてみると、七世紀以前には、言語学上の地域的特殊性を識別することはできない。のちのフランス語やイタリア語、スペイン語だのといった特徴が現れてくるのは、「ゲルマン大侵入時代」と呼ばれるにふさわしい西暦六〇〇年ごろ以降である。それは、いまわたしたちが触れることのできる唯一のものである文字言葉にも現れている。これらの特徴的な痕跡が、話し言葉にはもっと早くから現れていたとすると、それらは、当然、信徒たちを読み聞かせるために作られた文学のなかになんらかの反響を及ぼしていたであろう。

そこから、次のように結論することができる。

五世紀のガリアでは、いたるところでラテン語が話されていたし、とくに文字に書かれたのは専らラテン語であった。しかし、繰り返しになるが、話されていたラテン語は一種類だけではなく、多様な形のラテン語であった。この状況のなかにゲルマン人たちが入ってきたのである。

二、ゲルマン人侵入の衝撃とラテン語の維持

ガリアにやってくるゲルマン人たちが増えたのは五、六世紀からであるが、それより以前から、ガリアには、ローマ帝国に仕えるゲルマン人傭兵の入植地が幾つかあり、これらのゲルマン人たちは、ガロ＝ローマ

人たちとも日常的に話をしてきた。それは、どんな言葉によってであろうか？ この疑問には、その後の進展から類推することによってしか答えられない。

一般的に、移住してきた人は、入っていった土地の人々の言葉を習得するよう努力したし、いまでもフランス語がゲルマン語によりもはるかに多くをラテン語に負っていることは確かである。したがって、ガリアに配置されたゲルマン人傭兵たちが話したのはラテン語であった可能性のほうが高い。それでも、三世紀以来、ゲルマンの語彙でラテン語に入っていたものもある。たとえば、白い色を指す言葉として、ラテン語の「albus」と並んでゲルマン語の「blank」が使われるようになっていく。

五世紀には、幾つかの蛮族王国の建国に伴って、ゲルマンの言葉が「新しい主人の言葉」という様相を呈し、地域によっては、新しいゲルマン系の人々と話をするのに欠かせなくなっていく。六五九年、ムンメリヌスがノワイヨンの司教に任じられたのは、彼がラテン語だけでなくゲルマン語も話せたからであった。

しかし、ラテン語は、侵入者のゲルマン人たちよりずっと数が多く、住民の圧倒的多数を占めつづけたガロローマ人の言葉として残った。しかも、ラテン語は政府の言葉、文化の言葉、ローマ教会の言葉として威信を保ち、《野蠻》の対極にある《文明》を代表していた。いまでもゲルマン人たちについて知るうえで必須の源泉になっている蛮族たちの法律は、当時まで口承で伝えられていたのを蛮族の王たちがラテン語で文書化させたものである。

五世紀の重要な文化的出来事が、四九六年（または四九九年）のクローヴィスの洗礼によって象徴されるフランク人たちのカトリックへの入信である。そもそも西側ヨーロッパではキリスト教の典礼はラテン語で行われ、キリスト教の教義はラテン語で教えられたから、ラテン語が西欧における教会の言葉となっていた。

六世紀になっても、しかも相手が農民であったとしても、アルルのカエサリウスのような、古典的教養を身につけた司教は、ラテン語で説教しているが、わたしたちは、福音書の解説を主とした彼の説教が、通訳を介さなくても理解されていたと断定することができる。この時代に問題になるのは、もはや「卑俗な言葉 *sermo humilis*」よりも、むしろ「田舎言葉 *sermo rusticus*」である。この用語は、この世紀の終わりごろにトゥールのグレゴリウスが使っているものであるが、説教がラテン語で行われたことに変わりはない。

いずれにしても、移住してきたフランク人も、支配層の人々はすぐラテン語の習得に努めたことは間違いない。ラテン語が法律と行政、教会の言葉であるとともに住民大多数の言葉だったからである。

このころから、いわば胎内で生長を続けていたフランス語は、発音要素の幾つかについてゲルマン語から影響を受けた可能性がある。フランス語の有音の「h」もそこから来ているし、「w」を「ou」と発音するのも、この影響による。これは北東部の *Warcq*（訳注・同じ地名はアルデンヌのシャルヴィル近くと、もっと東のメッス近くと二つある）の話し言葉に残っており、フランス語に「gw」、ついで「g」をもたらした（たとえば、*wardon* = *gwarder* = *garder*）。とくにゲルマン語がフランス語にもたらしたのは、戦士の質を示す「hardi」（勇敢な）、「orgueil」（誇り高）、「軍隊用語の「garder」（見張りをする）、「brandir」（剣を振りかざす）、農耕に関わる「jardin」（菜園）、「haie」（垣根）、「gagner」（土地を手に入れる）、「osier」（柳の枝）など）である。

注目されるのが、ガリアにおける言語上の境界線の移動、とくにラテン語領域の後退であるが、これはゲルマン人の侵入がもたらした結果である。こうして、フランス王国の国境線は、北はフラマン語地域との境界、東はドイツ語地域との境界線上に定着していった。それに加えて、六世紀には、ジュート人、アングロ人、サクソン人に逐われて、たくさんのケルト人がブリテン島から海峡を渡ってアルモリカにやってきたた

め、この地域（ブルターニュ地方）でフランス語領域は後退した。

トゥールのグレゴリウスは、当時話されていたラテン語を指して「*sermo rusticus*」（田舎向けの説教）という表現を用いている。彼はまた「*lingua mixta*」（混合語）ともいつている。事実、六世紀末には、話し言葉と書き言葉との隔たりが大きくなり、次の七世紀には、書き言葉自体、とくに行政文書の証書においてすら、否定しようのない品質低下を示す。おそらく、この世紀の終わりに現れた『聖リキエ伝 *Vie de saint Riquier*』は、この聖人ゆかりのソナム湾近くの修道院で、巡礼に來た信者たちに読み聞かせるために書かれたもので、そのラテン語テキストは、古典文法に照らすと間違いだらけだったが、信徒たちは内容を理解することができた。これらの間違いを言語学的に分析すると、前ロマンス語の言語構造が浮かび上がってくる。

そこでは、フランス語の創成プロセスが進行中である。わたしたちは、ほかの多くの領域においてと同様、この言語という領域でも、一つの転換が六〇〇年ごろに起きていたことを認めざるをえない。西暦六〇〇年より以前は、地理的社会的分化にもかかわらず、人々は、ラテン語を話していた。おそらく、そのラテン語は、形もレベルも多様であった。しかし、そうした多様な形やレベルに共通の特徴が幾つかあって、それが相違点に打ち勝っていた。ガリアの大部分でラテン語が話されなくなったのは六〇〇年ごろからのようであるが、前記のように、文法学者たちから「間違いだらけ」と断じられているラテン語で書かれた『聖リキエ伝』は、七世紀末になっても、民衆に読み聞かせて理解させることができたのであった。

では、フランス語が話され始めたのは、いつだろうか？ 九世紀以前については、答えられるだけの史料がないし、八二三年にトゥールで開催された宗教会議より以前には、参照できる明確なテキストもない。このトゥール宗教会議の文書に立ち戻ることは、「カロリング・ルネサンス」と呼ばれてきたものに立ち返る

ことである。それは、とりわけ、シャルルマーニュのまわりに集められた学者たちが、古代の文法学者たちの記している規範により一層合致したラテン語を復活させたものだからである。しかし、このことは、彼ら聖職者たちに、ガリアの住民たちの言葉がもはやラテン語ではなくなっていることに気づかせ、これが、司牧としての視野のなかにドラマティックな転換をもたらしたのであった。

三、ラテン語の復活とフランス語の創出

「《カロリング・ルネサンス》はラテン語を復活させた」と言われているが、わたしたちにとって重要なのは、それが「フランス語の誕生と認知を引き起こす働きをしたこと」(Bernard Cerquiglini)である。

コミュニケーションのための言葉は、おそらくメロヴィング朝末期の王たちのもつとで、八世紀前半には、教会自身と同じく、地方ごとにばらばらになっていた。大多数の聖職者たちは、古典ラテン語の素養もなかったし、接することさえなくなっていた。七四〇年代、ボニファティウスは、フランク教会を改革するとともに、ラテン語文法書を編纂している。彼の教会改革は、聖職者たちには聖典(したがってラテン語)に親しむよう奨励するとともに、王政秩序の回復をめざしたものであった。ピピン三世の聖別(751)に続く何年かの間に、王室尚書局において一種の正書法が復活しており、証書類に使われているラテン語にも改良の跡が見られる。こうして宮廷を震源として、王(ついでに皇帝)の推進によってラテン語が復活し、それ

が各地の大修道院へと広がっていった。

ラテン語の再生

ミシエル・バニアールが「全ヨーロッパからやってきた文法学者たちの集団的介入によって、ラテン語規範への強行軍的復帰が行われた」と書いているように、《カロリング・ルネサンス》を推し進めたのは、各地からフランク王国に移住してきた知識人たちであった。ボニファティウスはアングロ・サクソン人であり、シャルルマーニュの首席顧問であったアルクイヌスも、同じくアングロ・サクソン人であった。文法学者のピサのペトルス、歴史家のパウルス・ディアコヌスはランゴバルド人、詩作でも有名な司教のテオドウルフは西ゴート人である。ラテン語規範の復活というフランク王の意志は、こうした外国人の学者たちの活躍によって行われたのである。

わたしたちが近づき観察することができるのは、文字に書かれた形でのラテン語の復活であるが、では、発音は、どうだったのだろうか？ アングロ・サクソン人のアルクイヌスとランゴバルド人のパウロス・ディアコヌスとでは、言葉のアクセントも違っていたはずで、シャルルマーニュの宮廷で、彼らの会話が、どのように繰り返られていたか、興味をそそられるところである。聖職者や修道士たちの訓育にあつては、書くのにも話すのにも、文法的に正しい言葉を身につけたいという意志が認められれば充分としなければならぬ。たとえば、トゥールのそのような大きな写本アトリエでは、これ以後、テキストに句読点が見られるようになる。これは、それまでになかったことで、間違いだらけのラテン語で書かれたメロヴィング時

代の聖人伝が、質のよいラテン語で、この時期に相次いで書き直されており、そこには、全キリスト教徒を正しいラテン語世界のなかに導こうという教会当局の意図が窺われる。信徒ひとりひとり、『主祷文 *Patet*』と『使徒信経 *Credo*』を唱えることができなかったらならないと定めた法令まで出されているが、これは過剰な要求であった。

ここに、「カロリング・ルネサンスのドラマ」と呼ばれるものの正体が浮かび上がってくる。それは、民衆がついていけるものではとうていなかった。八世紀の民衆は、ラテン語を話すことはなくなっていた。『聖リキエ伝』を聴いて理解できたが、九世紀の民衆は、理解できるだけの言語能力もなくなっていた。ミシェル・バニアルは、「カロリング朝の人々は、メロヴィング時代の行き方に終止符を打ち、書き言葉と話し言葉を切り離し、ラテン語を書き言葉として選んだ。——そこから、説教師たちにとって、ラテン語の力量を磨けば磨くほど、人々を教化することができないという絶望的事態が生じた」と述べている。ラテン語復活の目的は、キリスト教徒たちを聖典に近づけること、典札あるいは祈り全般のなかで用いられる決まり文句が完璧なものに近づき、神に聞き届けてもらえるようにすることであったが、このラテン語の復活によって、キリスト教会と宮廷は、自分たちが教え、救済へ導かなければならない民衆とのコミュニケーションを結果として断ち切ってしまったのであった。

フランス語を話すこと

そこから、説教師たちは、もはや別の言葉で話しかけなければならぬことを自覚しはじめる。トゥール

宗教会議(813)の十三号決議は、「各司教は、説教において、人々の教化に必要な勧告を与えること。この説教をロマンス語またはゲルマン語に訳して、農民信徒たちが内容をより容易に理解できるよう努力すべきである (et ut hasdem homelias quisque aperte transferre studeat in rusticam romanam linguam aut thiotiscam quo facilius cuncti possint intellegere quae dicuntur)」と述べている。ロマンス語(すなわち原フランス語)の人々は、教養ある聖職者のラテン語を理解することができなくなっていたため、ラテン語と言語学的関連のないゲルマン語(チュートン語)は翻訳が必要であったように、ラテン語から派生したロマンス語へも翻訳が必要になっていった。しかしながら、右の決議で、「より容易に」という比較級の副詞が使われていることに注目しよう。これは、この九世紀初めにもなお、翻訳なしでラテン語を理解できる人々がいたことを意味している。

八一三年には、シャルルマーニユの命令で、ほかにも幾つか、教区会議(synodes)が開催されており、フランク人の国であっても、さまざまな言葉が地理的に分布していたと考えられる。その一つであるマインツの教区会議でも、「民衆が理解できるように説教せよ」との勧告がされているが、この地方で人々が理解できるように、ということ、明らかにゲルマン語で説教せよということである。そのほか、アルルやシャロン・シユルソーヌで開催された会議では、この指示はきわめて一般的であり、これらの南仏地域では、ラテン語の知識が維持されていたことが推察される。北フランスのランスで開催された教区会議は、「説教は、個々の信徒に合わせ、ロマンス語とチュートン語のいずれでもよい」としている。

ロマンス語群のなかでも最も早くラテン語から独立しようとする傾向性を見せたのはフランス語であり、イタリア語、プロヴァンス語あるいはスペイン語について自主独立の意志が現れるのは、十、十一世紀以後である。それはなぜだったのだろうか? 第一に考えられるのは、ゲルマン語の影響がとくに発音の面で最

も強かったのがフランス語においてであったことであり、加えて、『カロリング・ルネサンス』はフランク帝国の中心部と北部地域の現象だったからである。この『ルネサンス』の影響は、イタリア、プロヴァンスあるいはアクイテーヌには少ししか波及せず、イスパニアには全く及ばなかった。その結果、『カロリング・ルネサンス』は、フランスの北半分に持続的な文化的優位性をもたらしたのであった。

さて、すでに述べたように、この『ルネサンス』の本質の様相の一つは、ラテン語の復活である。人々は、念入りに校訂された古代著述家たちの写本を手に入れようと努力し、文体においても文法でも発音についても、古代の作品を忠実に模倣しようとした。このため、より学問的であるうとする文学的言葉と一般民衆の話し言葉であるロマンス語との隔たりが大きくなっていった。

それに加えて、『カロリング・ルネサンス』の責任者たちの多くは、ゲルマン系の言葉を話す人々であった。ボニファティウスやアルクイヌスは、祈りと学問と行政の言葉としてラテン語を身につけていたが、ラテン語は、彼らの母語のサクソン語とは全く共通点をもっていないかった。これは、シャルルマーニュ自身についても同じで、彼は、文法学者たちからラテン語を学ぶ以前は、フランク人のゲルマン語（高地ドイツ語に属する中部ドイツ方言であるフランク語 *Frankque*）を話していた。したがって、アルクイヌスやシャルルマーニュにとつて、ガリア住民が話していたロマンス語は第三の言葉であり、話し言葉のゲルマン語や、話し言葉であるとともに書き言葉であったラテン語に比較して独特の言葉であった。

ミシェル・ソ Michel Sot

1942年生まれ。初期中世フランス史を専門とする。パリ第4大学名誉教授。

ジャン＝パトリス・ブデ Jean-Patrice Boudet

中世の占星術・魔術の研究が専門。オルレアン大学中世史教授。

アニータ・ゲロ＝ジャラベール Anita Guerreau-Jalabert

1950年生まれ。中世における親族関係の研究を専門とする。国立科学研究所（CNRS）研究部長。

桐村泰次（きりむら・やすじ）

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒（社会学科）。欧米知識人らとの対話をまとめた『西欧との対話』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』などがある。

中世フランスの文化

HISTOIRE CULTURELLE DE LA FRANCE: LE MOYEN ÂGE

2016年3月10日 初版第1刷印刷

2016年3月20日 初版第1刷発行

著者 ミシェル・ソ、ジャン＝パトリス・ブデ、
アニータ・ゲロ＝ジャラベール

訳者 桐村泰次

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1474-2 ©2016 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。